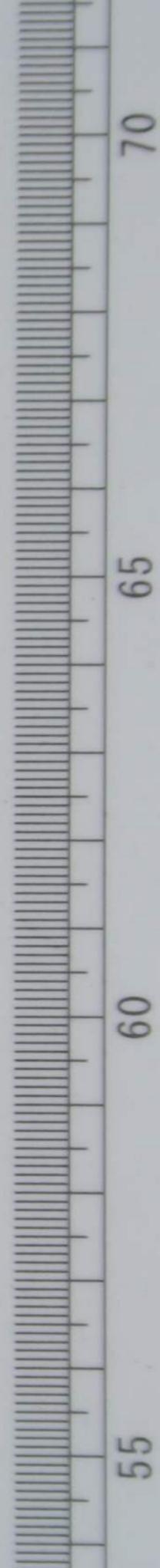


上路



短歌

路

上

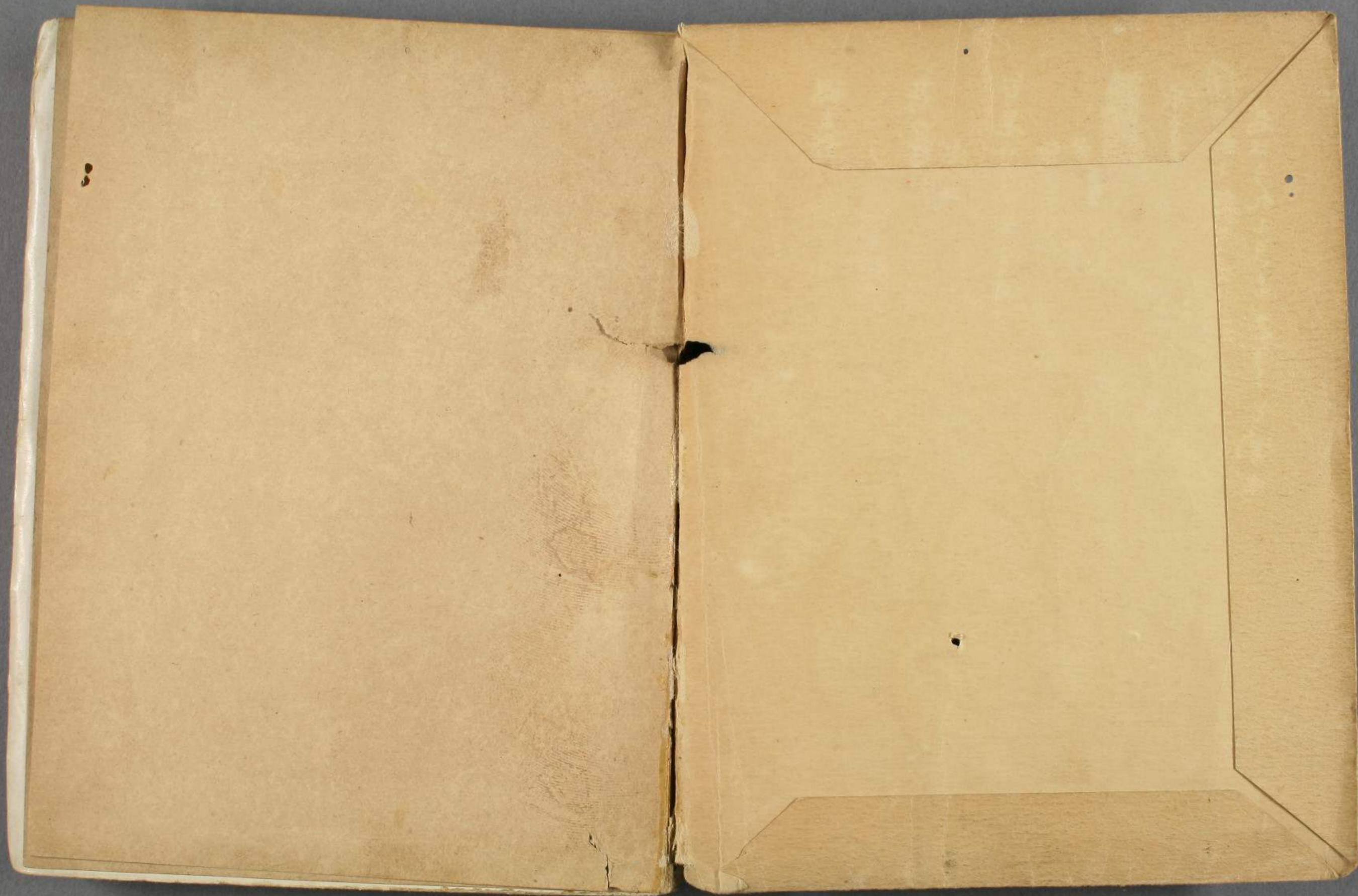
若

山

牧

水

博信堂藏版



飲みゆるはに令みしウイをサヲ

舌を刺すのは快よんぢ

妹を我に許すとの賜ひし

人の妹の早ゆく見たさよ

其の芳見し事のある法わしと眼

あはれあすはりたりと聞く

しり老いし女の記憶はちれま

昔はあはれし地は是は来れま
昔もきせとの



我才ははきばるまのまはりのと

川の前は横はうたり初あよ

あはうれしきしうたうと聞と

上 路

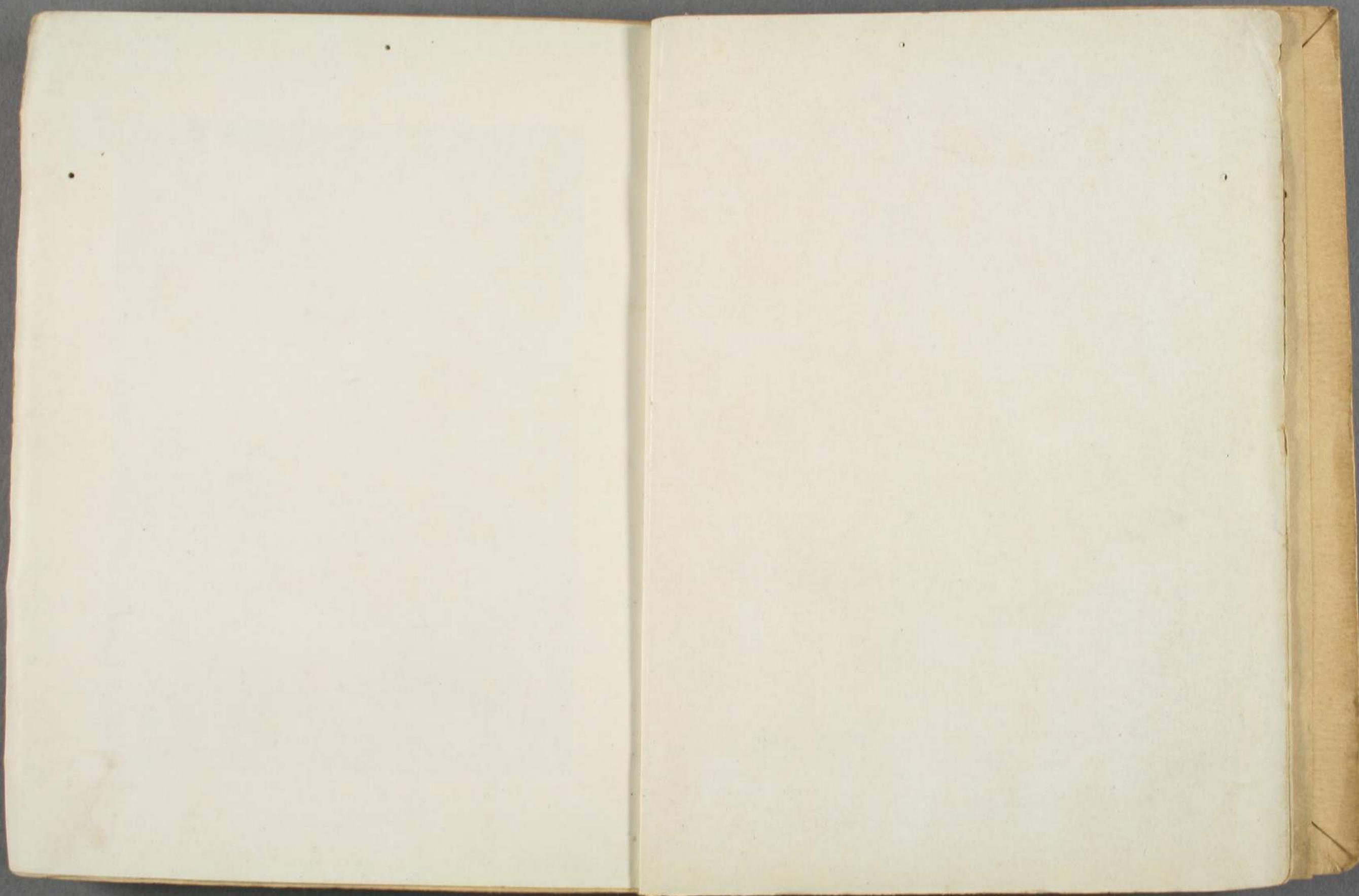
水 牧 山 若

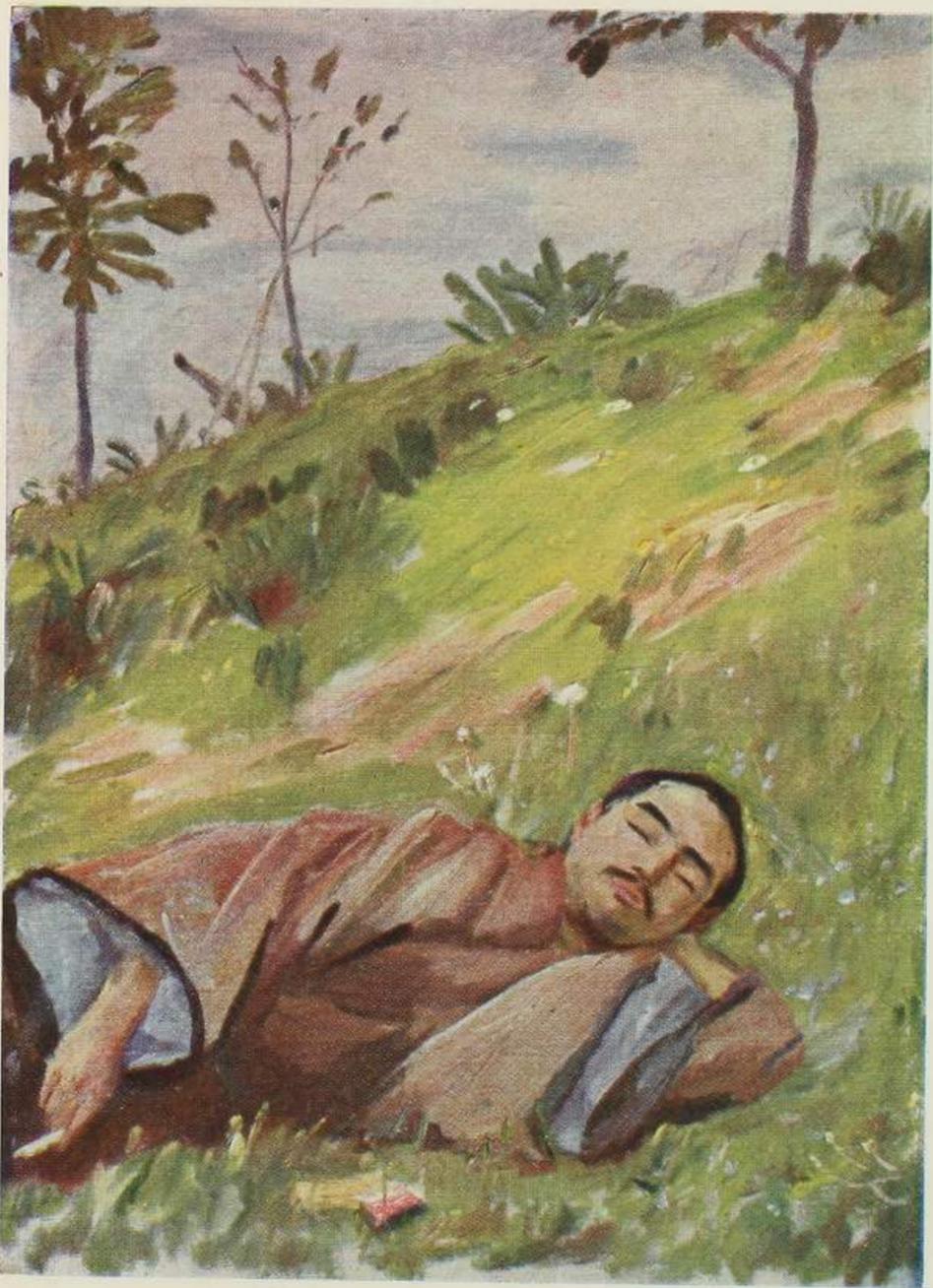
版 藏 堂 信 博

上 路

水 牧 山 若

版 藏 堂 信 博

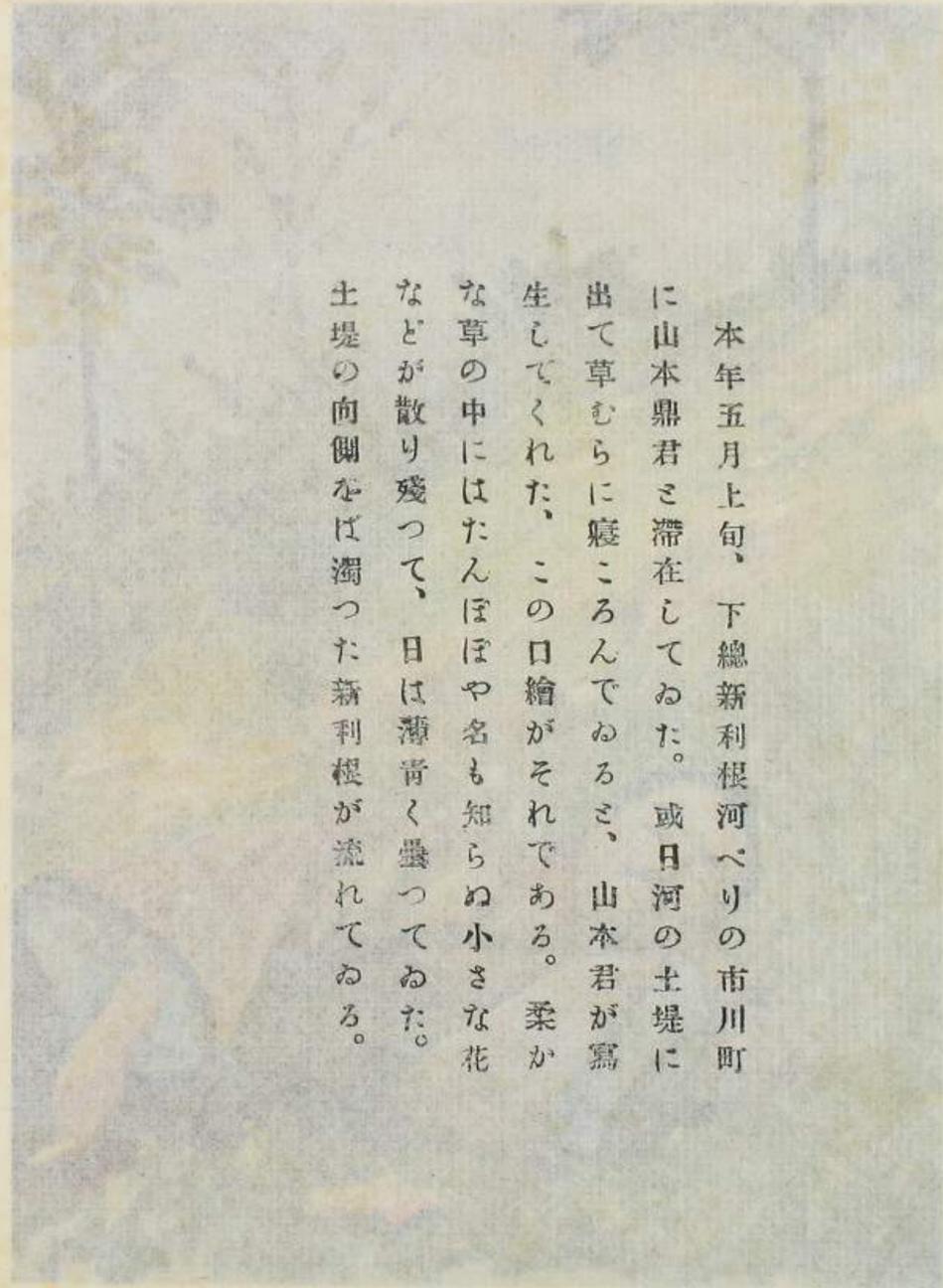




土壁の由開ふ以露の才藤野野を雲外了る。
 竹も花錯り露の才、日月露青く経へ了る才。
 草の中刈刈才入刈刈やまも味るの小を草
 集うたう外才、この日露を多味了る。葉を
 出ア草さるに露こるふ了るる。山本谷を露
 山本集林を露弄了る才。日月露の土壁に
 本半正良土壁、千露露味露所へりの市川

路上

若山牧水



本年五月上旬、下總新利根河べりの市川町に山本君を滞在してゐた。或日河の土堤に出で草むらに寝ころんでゐると、山本君が寫生してくれた、この口繪がそれである。柔かな草の中にはたんぽぽや名も知らぬ小さな花などが散り残つて、日は薄青く曇つてゐた。土堤の向側をば濁つた新利根が流れてゐる。

自序

昨年の春出版した「別離」以後の作約五百首をあつめてこの一冊を編んだ。昨一年間に於けるわが生活の陰影である。透徹せざる著者の生きやうは、その陰影の上と同じく痛ましき動搖と朦朧さを投げて居る。あての無い悔恨は、これら自身の

作品に對する時、こゝに烈しく著者の心を刺す。我等、眞に生きざる可からざるを、また繰返して思ふ。

明治四十四年九月

若山牧水

自明治四十三年一月
至同 四十四年五月

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀しかりけり

わが足の着きたる地もうらさびし彼の
蒼空の目もうらさびし

静やかにさびしき我の天地に見えきた
るとき涙さしぐむ

死にがたしわれみづからのこの生命食
み残し居りまだ死に難し

光無きいのちの在りてあめつちに生く
とふことのいかに寂しき

手を觸れむことも恐ろしわがいのち光
うしなひ生を貪る

たぼたぼと樽に満ちたる酒は鳴るさび
しき心うちつれて鳴る

寂しさは屍に似たるわが家にこの酒樽
はおくられて來ぬ

この樽の終のしづくの落ちむ時この部
屋いかにさびしかるべき

酒樽さかづきをかかへて耳みみのほごりにて音ねをさ
せつつおごるあはれさ

おとろへしわが神経しんけいにうちひびきゆふ
べしらじら雪ゆきふりいでぬ

ゆふぐれの雪ゆき降ふるまへのあたたかさ街まち
のはづれの群集ぐんじゆの往來ゆき

ひとしきりあはく雪ゆきふり月照つきてりぬ水みづの
ほごりの落葉おちばの木立こだち

白粉おしろいのこぼれむとする横顔よこがほに血ちの潮しほし
きたりたそがれにけり

窓まどかけのすこしあきたるすきまより夜よる
の雪見ゆきみゆねむげなる女をんな

投げかけし女をんなひとりのたましひをあは
れからだを抱いだきなやめり

酔よひはてて小鳥こどりのごとく少女せうじよ等はらはかる
く林檎りんごを投げかはすなり

のびのびと酒の匂ひにうちひたれり乳に
手を置きねむれる少女

一時の鐘とほくよりひびきいや深に三
月風吹く夜のなやむかな

枕より離れしときやしづかなる女のひ
とみわれに對へり

倦みはてしわれのいのちにまつはりつ
断えなむとして匂ふ黒髪

みさをなきをんなのむれにうちまじり
なみだながしてわがうたふ歌

かなしげに疲れはてつつわれいたく句
へる腕ゆいかに逃れむ

あわただしく汝をおもひゆふぐれの窓
かけのかげに涙ぐみぬる

玉のごときなむぢが住める安房のなぎ
さ春のゆふべをおもひかなしむ

うれひつつ歩めば赤き上靴のしづかに
鳴れり二階のゆふべ

數知れぬをんなとちぎり色白のこのわ
かき友は酒をこのます

身も投げつころもなげつものをおも
ふゆふべかへさの電車の隅に

相寄りつ離れつ憎みなつかしき若きを
どこのむれのごよめく

夕ゆふまぐれ酒さけの匂ほふにひしひしとむくろ
に似にたる骨ほねひびき出いづ

沈ちん丁ちやう花げ青あをくかをれりすさみゆく若わかきい
のちのなつかしきゆふべ

われ歌うたをうたひくらして死しにゆかむ死し
にゆかむとぞ涙なみだを流ながす

獸けものあり混沌こんとんとして黄きに濁にごる世界せかいのはて
をしたひ歩あゆめる

なほ耐^たふるわれの身^{からだ}體^だをつらにくみ骨^{ほね}
もとけよと酒^{さけ}をむさぼる

酒^{さけ}すすればわが健^{すこや}かの身^みのおくにあは
れいたましき寂^{さび}しさの燃^もゆ

あな寂^{さび}し酒^{さけ}のしづくを火^ひに落^おせこの薄^{うす}
暮^{ぐれ}の部^へ屋^や匂^{にお}はせむ

酒^{さけ}のためわれ若^{わか}うして死^いにもせば友^{とも}よ
いかにかあはれならまし

歸りくればわが下宿屋のゆふぐれの長
二階に灯のかげもなし

書き終へしこの消息のあとを追ひさび
しき心しきりにおこる

光線のごとく明るくこまやかにこころ
衰へ人を厭へり

おとろへの極みに來けむ眼に満てるあ
らゆる人の憎し醜し

愴恨と街をあゆめば大ぞらの闇のそこ
ひに春の月出づ

深深と赤き灯よごむいろ街を酔ふて走
れば足音がする

ひとつ飲めばはやくも紅く染まる頬の
友もわが眼にさびしかりけり

まれまれに相見る友のいづくやらむさ
びしげなるに心とらるる

齒を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の
小川に魚を釣りにき

父おほく家に在らざり夕さればはやく
戸を閉し母と寝にける

ふるさとは山のおくなる山なりきうら
若き母の乳にすがりき

ふるさとの山の五月の杉の木に斧振る
友のおもかげの見ゆ

おもひやるかのうす青き峽のおくにわ
れのうまれし朝のさびしさ

親も見じ姉もいとほしふるさどにただ
檳榔樹を見にかへりたや

衰へてひとの來るべき野にあらず少女
等群れて摘草をする (五首戸山が原にて)

めづらかに野に出で來ればいちはやく
日光に酔ひつかれはてける

つみ草つみくさのそのうしろかげむらさきの匂にお
へる衣きぬのかなしかりけり

梢うねあをむ木蔭かげにすわりつみ草つみくさのどほき
少女せうにょを見みやるさびしさ

かの星ほしに人の棲すむとはまことにや晴はれ
たる空そらの寂さびし暮くれゆく

ふと寄よれば昔むかしなじみの或あるるをんななほ
三味さんみひきて此家こゝに住すみける

見詰^{みづ}めるてふけたまひしと女^{をんな}いふみづ
かろの老^{おい}はいかに知るらむ

三味^{しるみ}をおくをんなのまへの夜^よの白^{しろ}さわ
が古^{ふる}着^き物^{もの}わびしかりけり

はや既^きに浸^ひみをへけむわが五^ご體^{たい}酒^{さけ}をの
めども醉^ゐふことをせず

ややしばしわれの寂^{さび}しき陣^まに浮^うき彗^{ほう}星^{せい}
見^みゆ青^{あを}く朝^{あさ}見^みゆ

風光り櫻みだれて顔に散るこころ汗ば
み夏をおもへる

いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子
をばうちかつぎけり

かのをどめ顔の醜し多摩川にわか草つ
みに行かむとさそふ

われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世
にもわびしきなりはひをする

小田卷の花のむらさき散りてありまれ
にかへれるわが部屋の窓

頬をすりて雌雄の啼くなりたそがれの
花の散りたる櫻にすすめ

わが歌を見むひとわれのおとろへて酒
飲むかほを見ることなかれ

徳利取り振ればかすかに酒が鳴るわが
酔ざめのつらのみにくさ

月の夜半酔ひざめの身のとぼとぼとあ
ゆめる街の夏の木の影

あと月のみそかの夜より亂酔の断えし
日もなし寝ざめにおもふ

風ひかり桃のはなびら椎の樹の落葉と
まじり庭に散りくる

いねもせず白き夜着きて灯も消さずく
ちずさむ歌のさびしかりけり

初夏の木木あをみゆく東京を見にのぼり
来よ海も風ぎつらむ (友へ)

別れたるをんなが縫ひしものなりき古
き羽織を盗まれにけり

貧しければ心も暗し蟲けらの在り甲斐
もなき生きやうをする

やうやくに待ちえしごさくわがこころ
あまへてありぬ病みそめし身に

濁りたるままにこころは風ぎはてて醫
師の寢臺によこたはるかな

命より摘みいだすべき一すぢのさびし
さもなしかなしさも無し

思ひいでて寝ぬ夜しもなきあはれさの
二年を経てなほつづくらむ

なほもかく飽くことしらすひとを思ふ
われのこころのあはれなるかな

ふらふらと野にまよひ來ればいつのま
にさびしや麥のいろづきにけむ

はらみたる黒き小犬の媚びもつれ歩み
もかねつ青き草原

いつ知らず摘みし蓬の青き香のゆびに
のこれり停車場に入る

摘草のほひ残れるゆびさきをあらひ
て居れば野に月の出づ

あを草くさに降ふりくる露つゆをなつかしみ大野おほの
に居ゐればまろき月つき出いづ

わがいのち盡つきなばなむちまた死しなむ
わが歌うたよ汝なをあはれに思おもふ

花見はなみればはなのかはゆし摘つみてまし摘つ
むともなにのなぐさめにせむ

六月中旬、甲州の山奥なる某温泉に
遊ぶ、當時の歌二十二首。

雲くもまよふ山やまの麓ふもとのしづけさをしたひて
旅たびに出いでぬ水みづ無な月つき

たひらなる武藏むさしの國くにのふちにある夏なつの
山邊やまべへ汽車きしゃの近ちかづく

糸いとに似にて白しろく盡つきざる路みちの見みゆむかひ
の山やまの夕風ゆふかぜのなか

辻辻に山のせまりて甲斐のくに甲府の
町は寂し夏の日

初夏の雲のなかなる山の國甲斐の畑に
麥刈る子等よ

雲おもくかかれる山のふもと邊に水無
月松の散り散りに立つ

遠山のうすむらさきの山の裾雲より出
でて麥の穂に消ゆ

山^{やま}あひのちさき停車場^{ていしやば}ややしはし汽車^{きしや}
のどまれば雲^{くも}降^おりきたる

停車場^{ていしやば}の汽車^{きしや}のまごなる眼^めにさびし山^{やま}
邊^への畑^{はた}に麥^{むぎ}刈^かれる子^こ等^ら

山^{やま}山のせまりしあひに流^{なが}れたる河^{かは}とい
ふものの寂^{さび}しくあるかな

大河^{おほ}の岸^{きし}のほとりの砂^{いさご}めく身^みのさびし
さに思^{おも}ひいたりぬ

山越えて入りし古驛の霧のおくに電燈
の見ゆ人の聲きこゆ

わが對ふあを高山の峯越しにけふもゆ
たかに白雲の湧く

おほごかに夕日にむかふ青山のたかき
姿を見ればたふとし

木の葉みな風にそよぎて裏がへるあを
山に人の行けるさびしさ

しらじらとほき麓をながれたる小河
また見ゆ夕山を越ゆ

青巖のかげのしぶきに濡れながら啼け
る河鹿を見出でしさびしさ

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒
のほひの寂しくあるかな

泣きながら桑の實を摘み食ふべつつ母
を呼ぶ子を夕畑に見つ

酸すくあまき甲か斐ひの村むら村むらの酒さけを飲のみ富ふ士じ
のふもこの山やま越こえありく

ゆふぐれの河かはにむかへばすさみたるわ
れのいのちのいちじろきかな

かへるさにこころづきたる掌てのうちの
河か原はらの石いしの棄すてられぬかな

めづらかに明るき心さしきたりたまゆ
らにして消えゆきしかな

このままに衰へゆかばこの酒のにはひ
もやがて身に耐へぬらむ

さやりなく青蕉の葉のもつれあふその
よろこびを夜の床にする

高空に雲のうかべるあめつちのありの
すさびも身にさびしけれ

枕敷きすひ終りたるひとすぢのけむり
にこころなぐさめて寝む

ふるさとの濱に寄るなる白波の繪葉書
をもてかへり來よとふ

夏の夜やこころ少女のひとりだにわが
ものならぬかなしみをする

心ぬげし頬をかすかにながれたるこの
涙こそわりながりけれ

わだつみのそこのごとくにこころ風ぐ
樅りみの大樹おほきにむかふゆふぐれ

すさみたるこころのひまに濡ぬれて見みゆ
木の根ねに散ちれる青石あをいしかわれ

この瞳ひとみしばしを酒さけに離はなれなばもとの清きよ
さに澄すみやかへらむ

あかつきの寢覺ねざめの床こゝろをひたしたるさび
しさのそこに眼めをひらくなり

この鼻のひくきが玉にきずぞかし肌の
きよさよよく睡るひとかな

あはれまたねむりたまふかたまたまに
逢ふ夜はわきて短きものを

なげやりのあまきつかれにうち浸り生
きて甲斐あるけふを讃へむ

衰ふる夏のあはれとなげやりのこころ
のすゑと相對ふかな

涙^{なみだ}ややにうかび出^いづればせきあげしか
なしみは早^{はや}や消^きえて影^{かげ}なし

影^{かげ}さへもあるかなきかにうちひそみわ
がいのちいま秋^{あき}を迎^{むか}ふる

いひがひなきわれみづからへつらあて
かどすれば死^しに親^{した}しまむとす

君^{きみ}住^すますなりしみやこの晩^{おそ}夏の市^{いち}街^{まち}の
電^{でん}車^{しや}にけふも我^{わが}が乗^のる

三味^{さんみ}をひく手^てもとのふりのじかなれば
こよひのかくも身^みにはしむらむ

かりそめの一夜^{ひとよ}の妻^{つま}のなさけさへやむ
ごともなし身^みにしみわたる

蟬^{せみ}どりの兒^こ等^らにをりをり行き逢^あひぬ秋^{あき}
のはじめの風^{かぜ}明^{あか}き町^{まち}

をみなへしをみなへし汝^なをうちみれば
さやかに秋^{あき}に身^みのひたるかな

青あおやかに夜よのふけゆけばをちかたに松まつ
蟲むしきこゆ馬うま追おひも啼なく

蟲むしなけばやめばこころのとりごりにあ
はれなることしげきよひかな

洪水こうすいにあまたの人の死しにしことかかは
りもなしものおもひする

またさらにこそこの秋あきまで知しらざりしい
のちの寂さびに行ゆきあへるかな

九月初めより十一月半ばまで信濃國
淺間山の麓に遊べり、歌九十六首。

名も知らぬ山のふもと邊過ぎむとし秋
草のはなを摘みめぐるかな

朴の木に秋の風吹く白樺に秋かせぞふ
く山をあゆめば

城あとの落葉に似たる公園に入る旅人
の夏帽子かな（小諸懷古園にて）

秋風や松の林の出はづれに青アカシヤ
の實が吹かれ居る

秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の淺
間の寂しくあるかな

淺間山山鳴きこゆわがあぐる瞳のおも
さ海にかも似む

わがこころ寂しき骸を残しつつ高嶺の
雲に行きてあそべる

酒飲めばこころ和みてなみだのみかな
しく頬をながるるは何ぞ

秋かせの吹きしく山邊夕日さし白樺の
みき雪のごときかな

なにごとも思ふべきなし秋風の黄なる
山邊に胡桃をあさる

胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤と
んぼ等が來てものをいふ

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろ
びしものはなつかしきかな

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はし
づかに飲むべかりけれ

あはれ見よまたもこころはくるしみを
のがれむとして歌にあまゆる

残りなくおのが命を投げかけて來し旅
なれば障りあらずな

旅人は松の根がたに落葉めき身をよこ
たへぬ秋風の吹く

かなしみに驕りおごりてつかれ來ぬ秋
草のなかに身を投ぐるかな

小諸なる醫師の家の二階より見たる淺
間の姿のさびしさ

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原
に出であそぶかな

薄暗きころ火に似て煽り立つ野山も
うごき秋かせの吹く

顔ちうを口となしつつ雙手して赤き林
橋を噛めば悲しも

秋くさの花のさびしくみだれたる微風
のなかのわれの横顔

わがこころ碧玉となり日の下に曇りも
帯びず嘆く時あり

秋くさのはなよりもなほおとろへしわ
れのいのちのなつかしきかな

われになほこの美しき戀人のあるとい
ふことがかなしかりけり

松山の秋の峽間に降り來れば水の音あ
をしせきれいの飛ぶ

うちしのび都を落つる若人に朝の市街
は青かりしかな

身もほそく銀座通りの木の蔭に人目さ
けつつ旅をおもひき

絶望のきはみに咲ける一もとの空いろ
の花に酔ひて死ぬべし

黄ばみたる廣葉がくれの幹をよち朴の
實をとる秋かせのなか

かへり来て家の背戸口わが袖の落葉松
の葉をはらふゆふぐれ

せきあげてあからさまにも小石めく涙
わりなき小夜もこそあれ

濁り江のうすむらさきの水草のここに
も咲けば哀しわが生は

衰ふる夏の日ざしにしたしみて晝も咲
くどや野の月見草

長月のすゑともなればほろほろと落葉
する木のなつかしきかな

沈みゆく暗きこころにさやるなく家を
かこみてすさぶ秋風

汝が弾ける糸のしらべにさそはれてひ
たおもふなり小枝子がことを

わが母の涙のうちうつらむわれの
姿のあさましきかな

おほかたの彼の死顔ぞ眼にかぶこ
ろうれしく死をおもふ時

憫^{あは}れめどなほし強^しふるかつゆに似^にて衰^{おとろ}
へし子^こは肺^{はい}を病^やむてふ

戀^{こひ}人^{びと}よわれらひとしくおとろへて尙^なほ
生^いくことを如何^{いか}におもふぞ

こころややむかしの秋^{あき}にかへれるか寢^ね
覺^{さめ}うれしき夜^よもまじりきぬ

ほろほろと啼^なくは山^{やま}鳩^{はと}さしぐめるひと
みに青^{あを}し木^この間^ま松^{まつ}の葉^は

黄なる山まれに聞ゆる落葉はかなしき
酒の香に似たるかな

むらさきの暗くよごみて光る玉夢の
ちにもさびしくひかる

秋かせの信濃に居りてあを海の鷗をお
もふ寂しきかなや

わがいのち闇のそこひに濡れ濡れて螢
のごとく匂ふかなしさ

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ
旅人の身に前後あらずな

あざれたるわれの昨日の生活の眼にこ
そうつれ秋草に寝る

酒嗅げば一縷の青きかなしみへわがた
ましひのひた走りゆく

秋かせの都の灯かげ落ちあひて酒や酌
むらむかの挽歌等は

Sadly Poem

こほろぎの入りつる穴にさしよせし野
にまろび寢の顔のさびしさ

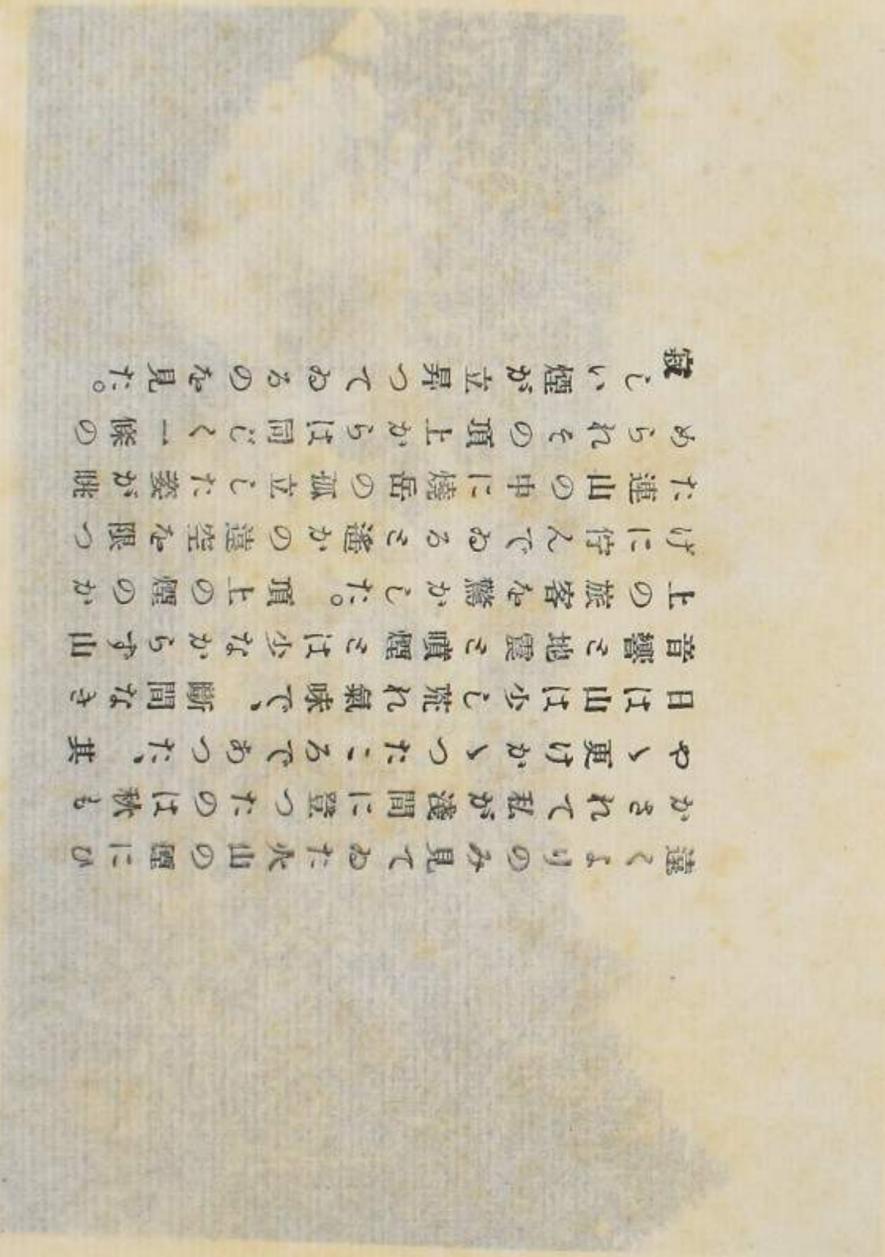
さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野
の秋の草枯れてきぬ

山麓の古驛の裏をながれたる薄にごり
河の岸はなつかし

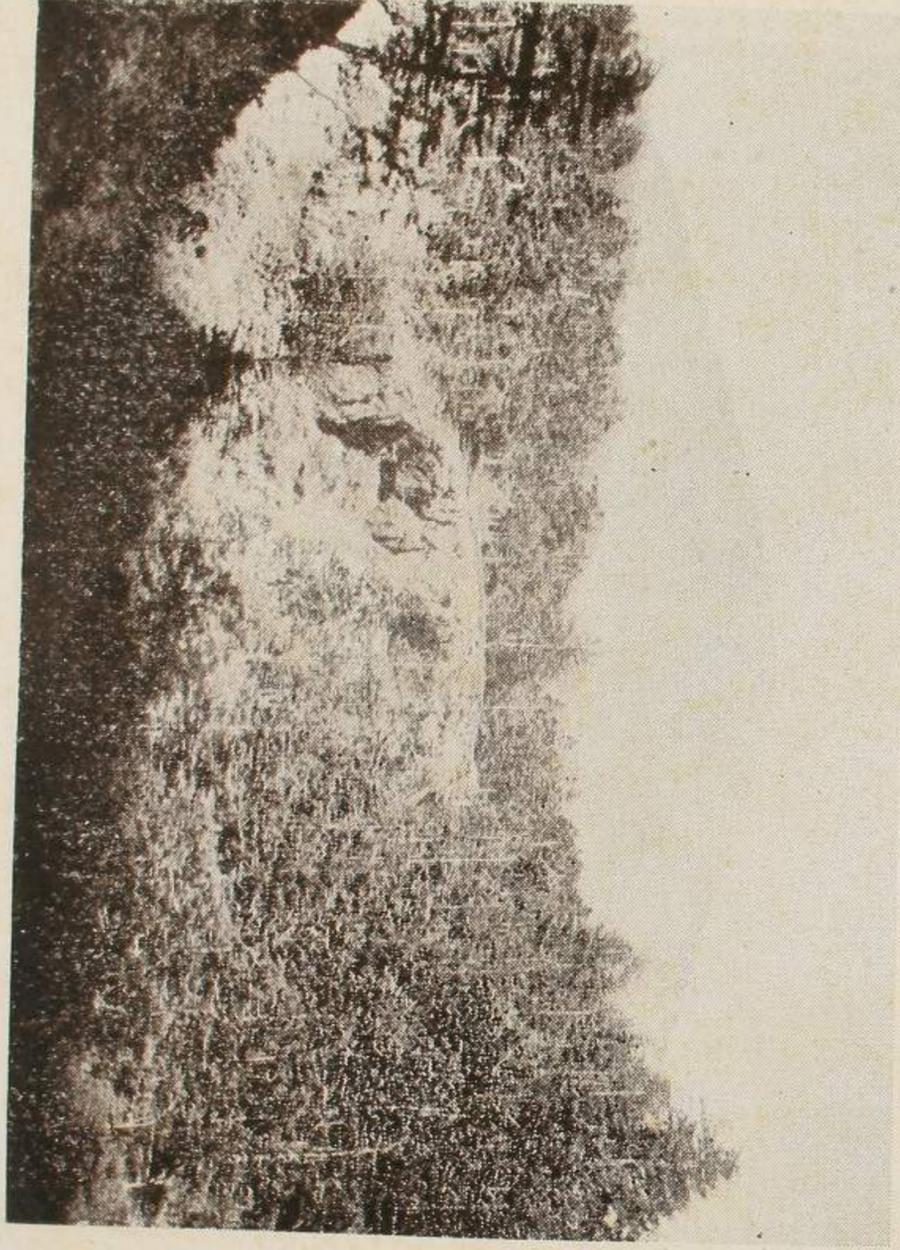
火の山のいただきちかき森林を過ぎら
むとしてこころいためり

雲くも去されば雲くものあとよりうすうすと煙けむりた
ちのぼる浅あさ間まわが越こゆ

火ひの山やまの老おい樹きの樞ちのくろろがねの幹みきをた
たけば葉はの散ちり來きたる



遠くよりのみ見ておた火山の煙にひ
がされて私が浅間に登つたのは秋も
やゝ更けがゝつたころであつた、其
日は山は少し荒れ氣味で、断間なき
音響と地震と噴煙とは少なからず山
上の旅客を驚かした。頂上の煙のか
げに佇んでおると遙かの遠空を限つ
た連山の中に焼岳の孤立した姿が眺
められその頂上からは同じく一條の
寂しい煙が立昇つておるのを見た。



た 火
け の
は 山

雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。
 雪の降る立降心うらまのる長き。

た
け
の
山

火の山の焼石原のけむりのかげ西ひが
し
さ
し
別
る
る
旅
人

風立てばさどくづれ落ち山を這ふ火山
の煙いたましきかな

見よ旅人秋のすゑなる山山のいただき
白く雪つもり來ぬ

眼をこめて暮れゆく山に對ふ時しみじ
みと身のあはれなりけり

あの男死なばおもしろからむぞと旅な
るわれを友の待つらむ

脊のいろ落葉にまがひ蜥蜴の子おち葉
のなかを行く音寂しも

尺^{しゃく}あまり延^のびし稚^こ松^{まつ}に松^{まつ}かさの實^みれり
秋^{あき}の山^{やま}の明^{あか}るさ

風^{かぜ}止^やみぬ伐^きりのこされし幾^{いく}もとの松^{まつ}の
木^この間^まの黄^きなる秋^{あき}の日^ひ

惶^{あはただ}しき旅^{りよ}人^{じん}のこころ去^さりあえず秋^{あき}の林^{はやし}
に來^きて坐^{すは}れども

秋^{あき}の森^{もり}ふと出^いであひし溪^{たに}間^まより見^みれば
淺^{あさ}間^まに煙^{けむ}斷^たえて居^をり

溪あひの路はほそぼそ白樺の白き木立
にきはまりにけり

忘却のかげかさびしきいちにんの人あり
旅をながれ渡れる

斯くばかり縮みをはれるものなればこ
の命またいつか延ぶらむ

眼は濁る腹いつぱいに呼吸づかむうら
やすにさへ逢ふ日知らねば

蟲むしけらの這はふよりもなほさびしけれ旅たび
は三月みつきをこえなむとする

終はりなき旅たびと告つげなばわがむねのさび
しさなにと泣なき濡ぬるるらむ

はつとしてわれに返かれば満まん目の冬ふゆ草山くさやま
をわが歩あゆみ居をり

冬ふゆ枯がれの黄きなる草山くさやまひとりゆくうしろ姿すがた
を見みむひともなし

草くさのうへわがよこたはるかたはらに秋あき
の淡雪あはゆききえのこり居をり

かかかる時ときふところ鏡戀かがみこひしけれ葉はの散ちる
木この間まわが顔かほを見みむ

蒼空あをぞらゆ降おり來きてやがて去こり行ゆきぬ山邊やまべ
の雲くももあはれなるかな

いただきの秋あきの深雪ふかゆきに足あしあとをつけつ
つ山やまを越こゆるさびしさ

冬草山鳥の立つにもあめつちのくづれ
しごとき驚きをする

ものおもひ断ゆれば黄なる落葉の峽の
おくより水のきこゆる

秋の日の空をながる火の山のけむり
のするにいのちかけけれ

日は暗く浮きあぶらなしわが命ただよ
ふかたに火の山の見ゆ

わがごとくさびしきころいつの代に
誰がうづめけむ山に煙見ゆ

火の山のけむりのすゑにわがころは
のかに青き花とひらくも

火の山を越えてふもとの森なかの温泉
に入れば月の照りたる

火の山のけむりのかげの温泉に一夜ね
むりて去りし旅人

湯あがりをひとりし居ればわが肌はだに旅たび
をかなしむ句こゝろひこもれり

なつかしやわがさびしさにさしそひて
秋あきのあは雪ゆきふりそめにけり

あはれなる女をんなひとりが住すむゆえにこの
東京とうきょうのさびしきことかな (以下歸京して)

人ひと知れず旅たびよりかへりわが友とものめうと
の家にねむる秋あきの夜よ

友が子のゆふべさびしき泣顔にならび
てものをおもふ家かな

友のごとく日ごと疲れてかへり來むわ
が家といふが戀しくなりけり

終りたる旅を見かへるさびしさにさそ
はれてまた旅をしぞおもふ

われを見にくらき都會のそこ此處に住
み居る友がみなつごひ來る

電燈のさびしきことよ旅路よりかへり
て友が顔を見る夜

——旅の歌をはり——

眼のまへのたばこの煙の消ゆるときま
たかなしみは續かむとする

鏡より沈めるひとわれを見る死に對
ふごとなつかしきかな

けふもまた獨りこもればゆふまぐれい
つかさびしく點る電燈

賣り棄てし銀の時計をおもひ出づ木が
らし赤く照りかへす部屋

わがままは狂へる馬のすがたしきつか
れて今は横はるかな

思ひうみふところ手してわが行けば街
のどよみは死の海に似る

ゆふぐれの風にし
のびて句ひ來ぬ隣家
の庭の落葉のけむり

かいかがみ路ばたの石手に取れば涙は
つひに頬にまろびいづ

歸るといふ世にいとはしきことあり
夜更けてけふもとぼとぼ歸る

歩きつつひとり言いふはしたなき癖さ
へいつか身につきしかな

街まちを行ゆきこともなげなる家いえ家のいえなりは
ひを見みて瞳ひとみおびゆる

ひもすがら火鉢ひばちかこみてゆびさきは灰はい
によごれぬ庭にはに吹ふく風かぜ

雪ゆきふれり暗くらきころの片かたかはにほのあ
かりさしものうきゆふべ

筆ふでとめて地震ちきんの終はるを待まつ時ときのらんぶ
の前まえのわれの秋あきの夜よ

戀人の肺にしるべるやまひよりなつか
しいかな盃をとる

死をおもふかつて登りし火の山の足も
とに見し烟をおもふ

あざわらふ死の横顔にさそわれてわが
片頬にもものぼる冷笑

『あれ見給へ落葉木立の日あたりすま
ひよげなる小さき貸家』

○ ゆふまぐれ袂たもとさぐれば先まづこよひ淨瑠じやうる
璃りをきく錢ぜには殘のこれり

○ わが部へ屋やに朝あ日ひさす間まはなにござも身み
になおこりそ日向ひなたぼこする

日向ひなたぼこねむり入いらむとするころのわ
が背せのかたに散ちりくる落葉おちば

日向ひなたぼこ酒禁さけさめられて衰おとろへしわれの身み
體たが日に醉よへるかな

日向ひなたぼこ出勤しゅつぎん前の友とももまたわが背せまく
らにうとうととする

日向ひなたぼこ枕まくらもとなるうすいろの瓶びんのく
すりに日ひの匂におふかな

たべのこしし飯いつぶまけばうちつごふ
雀すずめの子こらと日向ひなたぼこする

路みちばたの枯葉かれはばやしの日ひあたりにくる
わがへりのいつ寝ね入りけむ

つらかりしもののおもひでなつかしく
なりゆくころもうらさびしけれ

蝙蝠かぶに似にむとわらへばわが暗くらきかほの
蝙蝠かぶに見みゆるゆふぐれ

ただひそり離はなれて島しまに居をるごときこ
ろ暫しばくうごかぬゆふべ

ゆふまぐれ赤あかいんきもてわが歌うたをなほ
してゐしが酒さけの飲のみたや

ほんのりと酒さけの飲のみたくなるころのた
そがれがたの身みのあぢきなさ

ささまでのいらいらしさのいつ消きえて
をんなのそばに斯かく坐すわるらむ

ややすこし遅おくれて湯ゆより出でるひとを待ま
つ身みかなしき上うへ草履ぞうりかな

横よこの葉はのあをの葉はずるにつもる雪ゆききゆ
るゆきをば見みてありしかな

湯^ゆあがりのひとにまちかく居^ゐることの
春^{はる}はかなしきひとつなるべし

白^{しろ}粉^{こな}のあまきかをりも身^みにのらぬ湯^ゆあ
がりびとをなにとすべけむ

湯^ゆあがりのかほとかほとが鏡^{かがみ}のうへい
たづらをするかなしき眼^めをする

ちりやすきはなのにはひにふとふれて
なりぬかなしき空^{そら}のつばめに

わがかほにうすきねいきのうつつなや
灯あかりの三階さんがいのしたをゆく三味さんみ

あれを聴きけまくらまくらにしとしとど
したたりてくるとほき三味さんみ線せん

かの友とももこの友とももみな白玉しらたまのこころ濁にご
らずさびしきわれかな

獨ひとりりゐつひとつほしては一つ酌しやくぐさび
しき酒さけのわれのいのちか

見ればげに二十七なるわがつらと驚か
むとてわらふ白き齒

濠ばたの巢より乞食を追ひ立つるわか
き巡査のうしろかげかな

風のごとくあどさきもなき苦笑ひつら
にかびぬ獨り座るに

封切れば枯れし野菊そながからぬ手紙
と落ちぬわが膝のうへ

狐きつねにも巢すありといへりさびしさや林はやしの
おくの眼めにうつり來くる

ひとりひとり親したしきひとと離はなれゆくこ
のはかなさの棄すてがたきかな

松まつも見みゆしら梅うめも見みゆ或あるころのさび
しき安あ房はをおもひ出いづれば

梅うめやらむとわれをさがして來こしひと
松まつのはやしに行ゆきあひしかな

梅つぼむころともなればいづくよりこ
のかなしさは身にかへるらむ

ただ二日我慢してゐしこの酒のこのう
まさとはと胸暗うなる

いづくまでわれをあはれむはて知らぬ
汝がこころは海かさびしや

暗く重きこころをまたもたづさへて見
知らぬ街に巢をうつすかな

移り来て窓をひらけば三階のしたの古
濠舟ゆきかよふ

ふうらりとふところ手して住み馴れぬ
門を出づるはうらさびしけれ

移り来て見なれぬ街路の床屋よりいづ
るゆふべのくびのつめたさ

漂泊のかたみに残すひげなれば斯くや
あはれに見えまさるらむ

星あをくながれて闇にかげひきぬわが
ふところ手さむし街路ゆく

買ひきたりこよひかく着てぬる布團う
りはなつ日はまたいつならむ

日もひさしくわれにかかはりなきごと
く思ひしかふと少女等を見る

さびしさのとけてながれてさかづきの
酒となるころふりいでし雪

雪ゆきふるにさけをおもひつ酒さけ飲のみぬひと
りねむるはなにのさびしさ

雪ゆきふれりと筆ふでとりあげし消息そくしについ書か
きそへぬかなしげのこと

ふる雪ゆきになんのかをりもなきものをこ
ころなにとてしかはさびしむ

雪ゆきふればちららちららとさびしさがな
まあたたく身をそそるかな

はつとしてこころ變れば蒼暗くそこひ
も見えず降るそらの雪

灯のともる雪のふる夜のひとり寝の枕
がみこそなまめかしけれ

濠のはた獨りをとこがねる家ぞこころ
して漕げした通ふ舟

水の上へにふりきてきゆる雪の見ゆ酒の
にほひの身みに残るあり

知らぬ間に雨どかはりし夜のゆき酒の
のちなる指のさびしさ

草の葉のほひなるらむいらいとを
んなこひしくなりゆけるとき

かかる日は子供あつめに飴やの爺うた
ふ唄にもなみださしぐむ

ともすればかなしき愛に陥ちむとすた
だゆきずりに見むとおもふに

一昔ひとむかしまへにすたれし流行はやり唄うたくちにうか
びぬ酒さけのごとくに

虚無きよむ黨どうの一いち死刑けい囚しう死しぬきはにわれの『別わか離り』を讀よみるしときく

がらす戸こに白しろくみだれてふれる雪ゆきより
そひて見みれば寂さびしきものかな

わが袖そでにひとつふたつがきえのこる雪ゆき
もさびしや酒さけやにのぼる

身みもおもく酒さけのかをりはあをあと部へ
屋やに満みちたり酔よはむぞ今夜こんや

いざいざと友ともにさかづきすすめつつ泣な
かまほしかり酔よはむぞ今夜こんや

たまたまにただひとりして郊外こうがいにわが
出いで来くれば日ひの曇くもりたる

多摩川たまたがのあさきながれに石いしなげてあそ
べば濡ぬるるわがたもどかな

春あさく藍もうすらに多摩川のながれ
てありぬ憂しやひとりは

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれ
にもおもふ人のあれかし

曇日の川原の藪のしら砂にあしあとつ
けて啼く千鳥かな

川千鳥啼く音つづけば川ごしの二月の
山の眼におもり来る

山やまのかげ水みづ見てあればさびしさかわれ
の身みとなりゆく水となり

山やまかげの小川こがはの岸きしにのがれ来てさびし
やひとり石いし投げあそぶ

行ゆくなかれかの人情にんじやうのかなしきになれ
がいのちとなにと耐たへむや

山やまの樹きよ葉はも散ちりはてて鳥とりも来こすけふ
のわれにや似にてやすからむ

石拾ひわがさびしさのことごとく乗り
うつれとて空へ投げ上ぐ

友もうし誰とあそばむ明日もまた多摩
の川原に來てあそばなむ

水むすび石なげちらしただひとり河と
あそびて泣きてかへりぬ

枝葉のみ眞暗くおもく打ち茂り根は枯
るる樹かこころさびしき

西吹かば山のけむりはけふもなほ君住
む國のそらへながれむ (答背山君歌四首)

なかぞらに山のけむりの斷ゆる時けだ
しや君も寂しかるべし

淺間山そのいただきゆ眺めたる君が下
野は雲ふかかりき

夜の牛乳飲みつつおもひふらふらと淺
間の烟に走るさびしさ

松^{まつ}おほき彼の^か鎌倉^{かまくら}の古山^{ふるやま}に行^ゆかばや風^{かぜ}
のなかに海^{うみ}見^みむ

夜^よとなれば瞳^{ひとみ}のおくのよるこびのさび
しいかなや薄^{うす}く汗^{あせ}帯^おぶ

常陸^{ひたち}山^{やま}負^まくるなかれとこころのうちい
のるゆふべは居^をる所^{ところ}無し

常陸^{ひたち}山^{やま}つひに負^まけたる消息^{せうそく}は聞^きくにし
のびすわれ歌^{うた}咏^よまむ

山^{やま}を抜^ぬく君^{きみ}がちからの衰^{おとろ}へかなぎさ落^お
ちゆく汐^{しほ}のひびきか

わだつみの底^{そこ}の濁^{にご}りか手^てをつかねもの
うき空^{そら}のもとに棲^すみたる

さびしさは蝶^{ちょう}にかも似^にむこころにはつ
ゆかかはらず過^すぐす朝夕^{あさゆふ}

をりをりの夜^よのわが身^みにしひ入りさ
びしきことを見^みする夢^{ゆめ}あり

酒飲めば鼻よりうすく血の出づる身の
おとろへをいかに嘆かむ

いまは早や生死なるべき酒の香をうら
さびしくも戀ひわたるかな

いつとなくわれと身體をたのむこと薄
らぎそめて在りぬ晝夜

よぼよぼとわれ慰めに行くわれの姿か
徳利あまた並べる

軒のきしたは濁にごれる海邊うみべ手に持もつは晝ひるのく
るわの淺あさきさかづき

○ この家いへの軒のきのしたには舟ふねも無なし寄よる波なみ
もなし寂さびしき海うみかな

○ 手てをうちて踊おどれるわれのあはれさにな
ほ手てをうちてしきりに踊おどる

かたはらにならぶ銚てよ子の三みつふたつ早はや
やうらさびしるひそめしかな

汐さすやくるわの裏の濁り江に帆を垂
れてゆくゆふぐれの船

岸ちかくゆたかに過ぐる大船に人聲も
なしゐをき灯ともる

ゆふぐれの水にうかべばこどもなうさ
びしき群ぞ沖の鷗は

かもめかもめ空に一羽が啼くときは水
に入らむと身のかなしけれ

○おそらくは舟人ならむ唄のよさはやひ
けすぎのひやかしの群

かたはらの女去りたるこころよさなみ
だのごとき朝の酒かな

手まぐらのあさきえにしも身にはしめ
またの夜逢はむうしやうつり香

ちひさなる舟にわが乗りふらふらと漕
ぎいでてゆく春の濁り江

街暗くかすめる裏の濁り江に居群れて
啼かぬ海の白鳥

濁り江はかすみて空もかき垂れぬわが
居る舟に啼き寄る鷗

枯草にわが寝て居ればそばちかく過ぎ
る子供のなつかしきかな

かれ草のなかに散りたる檜の葉をひろ
はむとして手のさびしけれ

われとべば犬も走りぬ目のかぎり薄日
流れてかなしき野邊に

悲しめるあるじ離れて目もとほく野末
を走る愛犬のあり

鐵砲の弾のごとくに野を走るわが愛犬
を見るもさびしき

枯草にわが寝て居ればあそばむと来て
顔のぞき眼をのぞく犬

ゆふまぐれ遊あそびつかれてあゆみ寄よる犬いぬ
と瞳ひとみのひたと合あひたる

うす曇くもりなまあたたかき冬ふゆの日に犬いぬと
あそぶはかなしきことぞ

ましぐらにわれを馳かけ拔ぬき立ちどまり
振ふ返かる犬いぬの眼めを打て擲なす

かなしきは愛あいのすがたか口笛くちふえにとほく
野のすゑを馳かせ來きる犬いぬ

膝ひざにゐて深ふかき毛けを垂たれ櫛かの葉はに夕ゆふ日ひ散ち
るときわが小こ犬いぬ鳴なく

指ゆびに觸ふるるその毛けはすべて言こと葉はなりさ
びしき犬いぬよかふしきゆふよ

杉すぎの樹きをつと離はなれたる夕ゆふ風かぜのなかの鳥からす
の大おほいなるかな

一ひと本の杉すぎの木きの根ねに起たちかへるわが
げ長ながし野のは薄うす目めかな

若き日をささげ盡くして嘆きしはこの
ありなしの戀なりしかな

秋に入る空をほたるのゆくごとくさび
しやひとの忘れぬかな

はじめより苦しきことに盡きたりし戀
もいつしか終らむとする

おもかげの移るなかれとひとのうへに
いのりしことはまたくあれども

○五年にあまるわれらがかたらしひのなか
の幾日をよろこびとせむ

一日だにひとつ家にはえも住まず得忘
れもせず心くさりぬ

○わがために光ほろびしあはれなるいの
ちをおもふ日の來ずもがな

ほそほそと崩えいでて花ももたざりき
このひとともの名も知らぬ草

わびしさやふどわが立てる足もとの二に
月の地を見て歩み出づ

石油をつぐ音きこゆ二階より藪ごしに
見るちひさき家に

藪ふかく窓のもとよりうちつづく友が
二階の二月の月の夜

ふつとして多摩の川原のなつかしく金
を借り来て一夜寝に行く

砂すなのなかに顔かほをうづめて身みをもだえ泣な
くごそくして去さりぬ川か原はらを

かへるさは時とき雨あめとなりぬ多た摩ま川がの川か邊べ
の宿しゆくに一夜ひつよ寢ねしまに

わが顔かほに觸ふれて犬いぬ在あり枯かれくさの日向ひなたに
いねてももの思おもふとき

杉すぎの木この間まものおもふわが顔かほのまへ木こ
漏もら日びのかげに坐すわりたる犬いぬ

○
まさむねの一合瓶のかはゆさは珠にか
も似む飲まで居るべし

誰にもあれ人見まほしきこころならむ
けふもふらふら街出で歩く

付そをわしといふ人もかなと秋の口を

あつちまぬれん身年たの風吹し。

わが部屋にわれを待つべく一樽に酒は
断たねどされどさびしき

其處此處の友はいましも何をしてなに
思ふらむわれ早も寝む

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚
の棲むよりうらさびしけれ

三階の玻璃窓つつみ煤烟のほへるな
かにひとり酒養る

芝居見て泣けるなみだをひと知れずぬ
ぐはむとして身をはかなみぬ

平土間のほこりにまみれわがなみだ頬
をながるるわびしいかなや

かなしみにこころもたゆく身もたゆく
酒もものうし泣きぬれてゐむ

うち見やる舞臺のほかのさびしさにつ
まされてこそぬぐへ涙を

しくしくとまたもなみだの眼ににじむ
この劇場のはなれともなや

そこはかど深山の松葉ちることか寝ざ
めのこころ寄るところなし

わだつみの底にあを石ゆるるよりさび
しからずやわれの寢覺は

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼
吸することもなにぞさびしき

寢ざむればうすく眼に見ゆわがいのち
終らむとするきわの明るさ

眼のさめてしづかに頭もたげつつまた
いねむとす窓に星見ゆ

夜ふかく濠まにながるる落し水たぎ聞くこと
なかれ寢覺ねざむるなかれ

先づ啼なくは濁る濠邊ぼりのいしたたきほの
青あき朝あさを寢ねざめてあれば

かなしくもいのちの暗くらさはまらばみ
つから死しなむ砒素ひそをわが持つ

青海あゐのひびくに似にたるなつかしさわが
眼めのまへの砒素ひそに集あつる

一つぶの雪にかも似む毒薬の砒素ぞ掌
に在りあめつちの隅

などがめそ腐るいのちを恐ろしみなつ
かしくこそ砒素をわが持て

死にてのちさむく冷ゆれど顔のさま變
らずといふ砒素はなつかし

まなこ閉ぢ口をつぐめるさびしさに得
耐へずついと立てど甲斐なし

ふるさとの美^み美^み津^つの川^{がは}のみなかにさ
びしく母^{はは}の病^びみたまふらむ

さくら早^{はや}や背^せ戸^との山^{やま}邊^べに散^ちりゆきしか
の納^な戸^とにや臥^ふしたまふらむ

病^びむ母^{はは}よかはりはてたる汝^{なん}が兒^こを枕^{まくら}に
ちかく見^みむと思^{おも}ふな

病^びむ母^{はは}のまくらにつごひ泣^なきぬれて姉^{あね}
もいかにかわれを恨^{うら}まむ

病む母を眼とちおもへばかたはらのゆ
ふべの膳に酒の匂へる

病む母をなぐさめかねつあけくれの庭
や掃くらむふるさとの父

葉をすべる露のごとくになげやりのこ
ころとなりて行くは何處ぞ

終に身を酒にそこなひふるさとへ歸る
か春のさびしかるらむ(友へ)

わが暗きこころを海に投げ入れむ洗み
て巖となりて苔生ひむ

のめつちに獨り生きたるゆたかなる心
となりて擧ぐるさかづき

指さきにちさき杯もてるささぐよめ
ゆらぐ暗きこころよ

なにとせむすこし酔ひたる足もとのわ
が踏む地よりかなしみは湧く

いまは早やとらへ難かり蒼暗き空に離
れてわれの悲しむ

眼も鈍くこころくもればおのづから眉
さへ暗し春の街見ゆ

雪消えてけふもけむりの立つならむ浅
間よ春のそらのかたへに

○
あは雪のそけてながれむ火の山のかの
松原に行きて死にたや

静かなりし口にかへらむとこころより
思へるごとしわれのよこ顔

をりをりは見えすなれどもいつかまた
巢にかへり居り軒の蜘蛛の子

わが部屋に生けるはさびし軒の蜘蛛屋
根の小ねすみもの云はぬわれ

誰ぞひとりほほるめばみないちように
酒をしぞ思ふ部屋のゆふぐれ

大君の城の五月の森林にゆふさりくれ
ばともる電燈

河を見にひとり来て立つ木のかげには
のかに晝を啼く蛙あり (以下十三首下總稻毛にて)

いつのまに摘みし菜たねぞゆびさきに
黄なるひともと持てる物思ひ

かくばかり清きころぞあざむくにな
にの難さと笑みて爲にけむ

眼^めとづるはさびしきくせぞおほぞらに
雲雀^{ひばり}啼^なく日に草^{くさ}につくばひ

根^ねのかたにちさく坐^{すわ}れば老松^{おとし}の幹^{みき}より
おもく風^{かぜ}降^おり來^{きた}る

海^{うみ}光^{ひかり}る松^{まつ}の木^この間^まの白砂^{しろすな}をあゆむもさ
びし坐^{すわ}らむも憂^{うれ}し

かなしさに閉^とぢしまぶたの臉毛^{かほげ}にも來^き
てやごりたる松^{まつ}の風^{かぜ}かな

耐へがたくまなこ閉づればわが暗きこ
ころ梢こすえに松風まつかぜとなる

波なみもなき海邊うみべの砂すなにわが居をれば空そらの黄き
ばみて春はるの月つき出づ

なぎさ邊への藻草もぐさ昆布こんぶのむらがりのなつ
かしいかな春はるの月つき出づ

眼めも開あかず砂すなにつくばひ夕風ゆふかぜの松まつの木こ
の間まにわがひとり居をる

しら砂すなにかほをうづめてわれ禱いのるかな
しさに身みをやぶるまじいぞ

このこころ慰なぐさむべくばあめつちにまた
なにももの代かふるあらむや

なにはなく天あま死にせむとおもひるし彼かれは
まことにけふ死しににけり

思おもふとなく思おもはるることさびしけれさ
もなき友ともの死しにゆきしとぞ

よべもまた睡られざりき初夏の午前の
街に帽かぶり出づ

酒を見てよろこぶわれのよこ顔をなが
めて居ればさしぐみ來る

衣ぬげば五月の松のこずるより日あを
く流れ肌はだに匂におへる

松脂の匂におひかわれの寂さびびしめるいのち
のはしか一ひとすちとなる

森出でてあをき五月の太陽を見上ぐる
額のなにぞ重きや

かたはらの地を見詰めて松の根にわれ
の五月をさびしがるかな

松の葉のしげみにあかく入日さし松か
さに似て山雀の啼く

こまやかに松の落葉の散りばへるつち
より蟬の子の這ひ出づる

ゆく春はるのゆふ日にうかみあかあかどさ
びしく松まつの幹みきならぶかな

○わが肌はだの匂におふも肌はだのうへを這はふ蟻あひのあ
ゆみもさびしき五月ごがつ

松まつの葉はの散ちりしく森もりにいぬるとてわが
手枕たまくらのいたむ晝ひるかな

松まつの根ねの落葉をらにいねてものを思おもふ夏なつの
背せ廣ひろの紺こんの匂におひよ

松^まばやしわが寝^ねて居^ゐればひらひらと啼^な
いて燕^{つば}がまひ過^すぎしかな

あなあはれいつかとなりの檜^ひの葉^はに這^は
ひもうつれる簑^み蟲^{むし}の子^こよ

松^まやにのあをき匂^{にお}ひの血^ちとなりてわが
身^みやめぐる森^{もり}の午^ご後^ごの目^め

草^{くさ}わけて雲^{くも}雀^{すずめ}の巢^すをばさがすこてわれ
の素^す足^{あし}のいたむ晝^{ひる}かな

美しく縞のある蚊の肌に来てわが血を
吸ふもさびしや五月

日も青きすすきの原に蟲を啄みつばく
らあまた群れあそぶかな

松の花うすく匂ふにさそはれてわが鬱
憂の浮き出でむとす

おほいなるむらさきの桐手に持てばわ
が世むらさきに見ゆる皐月野

わかやかに立てるすすきにふと觸れし
小指の切れて血のしみいづる

下總の國に入日し榛はらのなかの古橋
わが渡るかな（以下下總市川にて）

はり原やものおもひ行けばわが額のう
すく青みて五月けぶれる

あを草のかげに五月の地のうるみ健か
なれどわれに眼を寄す

ただひとり杉菜のふしをつぐこと
のあそびをぞする河のほとりに

藪すずめ群るる田なかの停車場にけふ
も出で来て汽車を見送る

しろき花散りつくしたる下總の梨の名
所のあさき夏かな

袖ひろき宿屋の寝衣着つつ見るアカシ
アの花はかなしかりけり

あめつちの青くくもれる河の邊の葦原
に巢をまもる葦切鳥

身を寄せし草のしげみのふかければう
らなつかしく物やおもはむ

ゆく春の草はらに來てうれひつつ露と
もならぬわがいのちかな

あを草の野邊をかへればわが影のいつ
しか月となりにけるかな

町の裏川蒸気船より降り立てば花火を
あげて子供あそべり

榛はらのあをくけぶれる下總に水田う
つ身はさびしからまし

ありなしの貧しき戀になになればわが
泣くことの斯くも繁なる

路上をはり

明治四十四年九月九日印刷
明治四十四年九月十二日發行

正價七拾錢

著者 若山 繁

發行者 東京市小石川區竹早町七番地
高橋 市 作

印刷者 東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地
遠藤 簾 治

印刷所 東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地
公木 社



發行所

博信堂書房

東京市小石川區竹早町 七番地
振替口座東京一三八五五

故尾崎紅葉著

紅葉遺稿

定價 八九拾錢

屑屋より発見されたる

不朽の名作

發行所

東京市小石川區竹早町
振替貯金一三八五五

博信堂

